水は生命のもと。

大きな海の水が太陽の光を吸収して
蒸発して、雲となり、青空を漂う。
その雲、一つ一つ、まったく同じ形のものはない。
やがて、それは雨や雪となり、地上に注ぐ。

そして、その水はいろいろな形になって
大地に注ぎ、小川となり、
大河となり、再び、海に注ぐ。

僕たちの生命も、その様な、まわりまわる、
生命のサークルの一瞬間に生きるものだ。

僕らの魂は、テーブルの上にあるコップの中の水の様だ。
コップは私の体で、水を僕の魂にたとえられる。

じゃあ、その水が、小川を流れ、大河を流れて、
行き着く海は、一体何だろうか。
それは、すべての命あるものの源、
神そのものではないだろうか。

神とは、広い海原の水そのものではないか。
僕らの生命が体から離れて、川を下り、
海に注ぐとき、僕らの魂は、神と一体になる。

なぜか、そんな気になると、生と死の境とは
海に注ぐ川の河口を連想させられる。
新しい、旅立ちのような印象を受ける。

43 奸策や悪意よりも誤解が原因や・・・・・・・・・186

Candy
in the Heart
189

萩原良昭